

Traditional Tales Stage 9 Beauty and the Beast

第 1 章

p.2

むかしあるところにハンサムな王子様がいました。その美しさは誰もが認めていましたが、王子様本人もそのことをよくわかっていました。

豪華な宮殿には部屋が 100 個もあり、王子様の召使いは 24 人もいて、庭も広大でした。しかし、これほどたくさんのすばらしいものを持ちながらも、王子様はよくイライラしたり不機嫌になったりしました。

p.3

その日も王子様は不機嫌でした。1 人の老婆が足を引きずるようにして宮殿の中に入って来ました。着ている服はボロボロで、ほこりまみれでした。

「このあわれな宿なしのおばあさんをどうかお助けください」老婆は頭を下げました。

「王子様は前に助けてくれると約束してくれましたよね」

p.4

王子様は前にそんな約束をしたことを思い出しましたが、そんなものは守らないことにしました。

「このみにくいおいぼれをつまみだせ！」王子様はどなりました。

召使いたちが老婆のまわりに駆け寄りました。

すると老婆が言いました。

「さがってな！」それは警告でした。

p.5

老婆が持っていた杖の先から光が放たれたかと思うと、召使いたちの姿がパッと消えました。

召使いが消えても、^{すき}鋤は自分で地面を掘り続け、ブラシは床の掃除を続けています。

「おまえも思い知るがいい」

老婆はそう言って、今度は杖の先を王子様に向けました。

p.6

すると王子様の姿形がだんだんと変わり始めたのです。体がどんどん大きくなり、足も靴の外に飛び出してしまいました。もう人間の足には見えませんでした。それは、大きくて毛むくじゃらの、まるで野獣の足のようでした。

王子様は自分の手に目をやりました。動物の毛のようなものがどんどん生えてきています。爪は長くて真っ黒なかぎづめに、歯は牙に変わってしまいました。

p.7

王子様は大急ぎで鏡に向かいました。一目見た王子様は恐怖におののきました。自分の姿がすっかり野獣そのものになっていたからです。

老婆は甲高く笑いました。「宮殿の庭のバラが枯れる前に、そのみにくい野獣の姿のままのおまえを愛してくれる人を探すことだね」

そう言って杖をひと振りすると、老婆は姿を消しました。

p.8

あの老婆は魔女だったのです。自分は何とひどいことをやってしまったのだろう。今さら気づいても、もう遅すぎました。

苦しくて、恥ずかしくて、悲しくて、王子様は泣き叫びました。その声は遠くの田舎町にまで響き渡りました。それはまさに野獣の遠ぼえのようでした。

第 2 章

p.9

その頃、その国のはずれの町では、1 人の商人が長い旅に出ようとしていました。

「おみやげはなにがいいかな？」商人は娘たちに言いました。2 人の姉さんは高価なものをいくつも書き

並べました。

p.10

1 番年下のベラは、心の優しい少女でした。ベラが好きなものは、本や音楽、それに動物や自然でした。「私はお父さんが無事に帰って来てくれればいいわ。でも、もしよかったら庭に植えるバラが1 枝ほしいな」

p.11

商人は遠くまで出かけて行って、一生懸命働きました。そしてやっと家に帰る時が来ました。娘たちのために買ったおみやげもたくさんつめました。途中でベラが欲しがっていたバラも手に入れようと思いましたが、

その途中で、商人はひどい嵐に見舞われました。

p.12

雨が横なぐりに吹きつけてきます。風はゴウゴウとうなり、雷鳴がとどろきました。そんなとき、暗闇の中にちらちらと光る灯りを見つけました。

「あそこで少し休ませてもらおう！」商人はそう思って、いそいで入り口に向かいました。中には誰もいないようでしたが、驚いたことに、扉は開いていました。

のぞいてみると、中は暖かくて、じめじめとした感じはまったくありません。まるで商人を歓迎しているように思えました。そこで商人は中に入ってみることにしました。

p.13

「どなたかおられますかな」商人は大きな声で言いましたが、人っ子一人見当たらず、何の音も聞こえてきません。

雨にぬれて疲れ切った商人は、暖炉の横に座らせてもらうことにしました。すると、誰もいないのに、目に見えない手があたたかい飲み物とおいしい食事を運んできてくれました。おまけに、商人の頭の後ろにクッションを置いてくれたりもしました。

商人はあまりのことに何度も目をこすりました。「これ

はきっと夢だ」

第3章

p.14

次の日の朝、目が覚めると、商人はバラを持って帰らなければならないことを思い出しました。庭には美しいバラの木がたくさん生えていました。商人は少しだけそこから分けてもらおうと、地面を掘りはじめました。

そのときです。どこからか恐ろしいうなり声が聞こえてきました。うなり声は次第に大きくなり、ついにどなり声にかわりました。

「よくも私のバラをとったな！」

p.15

突然、大きな野獣が姿をあらわしました。うなり声を上げ、今にもかみつきそうな勢いです。

「ああ、どうかお助けください！」商人は必死になって頼みました。「あなたの言うことはなんでもしますから」

「それなら、おまえが家に帰って最初に出会った生き物を私のところによこせ」

「ああ、それなら……！」商人は思いました。「家のまわりにはニワトリがいるぞ」

そう思った商人は野獣の言うとおりにすると約束しました。

第4章

p.16

家に着くと、商人はがく然としました。商人が最初に見たものは、ニワトリでもなく、イヌでもネコでもなく、なんとベラだったのです。ベラは父親に早く会いたくて飛び出してきたのです。

商人の顔は、まるで月の光のように真っ青になりました。商人がわけを話すと、ベラはためらわずに言いました。

「約束は約束よ」

p.17

ベラは野獣の家に向かいました。
野獣の家はすばらしいものでした。りっぱな家具に、座りごちの良いいす、おいしい食事……ただひとつ気になるのは、あまりにも静かなことでした。話し相手もいなければ、一緒に笑いあう人もいません。野獣も姿を見せないし、召使いはみんな目に見えません。家の中はいつもシーンと静まり返っていました。

p.18

ベラは毎日ピアノを弾きました。絵を描いたり、本を読んだりしました。欲しい物はなんでもありましたが、ベラは一人ぼっちでいることがさびしくてたまりませんでした。
ある夜、ベラは暖炉のそばに座って、声に出して本を読んでいました。それは悲しい詩でした。するとどこからかため息が聞こえてきました。ベラがおもしろい物語を読んでいると、今度はどこからかくすすと笑う声が聞こえてきました。

p.19

「そこにいるのはだれ？」ベラは大声で言いました。「隠れていないで出て来なさい！」
すると、ゆっくりと野獣が灯りのもとに進み出てきました。
その姿を見たベラはふるえ上がりました。「どうかこわがらないで。こわそうに見えるだろうけど、何もしないから」野獣が言いました。「頼むから、もっと本を読んでくれないか」
ベラは恐ろしくて体がふるえましたが、もう1度本を読み始めました。野獣はそれを静かに聞いていました。

p.20

それ以来、野獣はよくベラの朗読や歌を聴きに来るようになりました。ゆっくりではありましたが、ベラもだんだんと野獣を見てもこわくなくなってきました。「それに

とにかく、話し相手ができたんだもの……」ベラは思いました。

野獣はベラに遠い国の話をしたり、冗談を言って笑わせたりしました。ときには、庭から美しい花をとってきてくれたりもしました。

第5章

p.21

何週間が過ぎ、ベラはだんだん野獣のことが好きになってきました。野獣がやって来るのも楽しみになり、2人は友だちになりました。
そのうち、ベラは野獣がよく寂しそうにしていることに気がつきました。野獣はよく庭に行き、バラの花を見つめてはため息をついていました。あるときには、ほほに涙が伝っていることもありました。

p.22

ベラも悲しくなりました。
「家族に会いたいわ」ベラは野獣に言いました。すると野獣はベラにあるものをくれました。「これは魔法の鏡だ。きみが今見たいものを言えば、この鏡が映し出してくれる」
ベラはびっくりして鏡を見つめました。「かがみよ、かがみ、よく見せておくれ。私の大切な家族の様子を見せてちょうだい」

p.23

「まあ、大変！」ベラは息をのみました。「お父さんが病気だわ。お父さんの所に行かせてちょうだい。お願いよ」ベラは頼みました。
野獣はベラのつらそうな顔を見ているのにたえきれず、うちに帰してあげることにしました。出発するときに、野獣はベラに言いました。「帰って来なくなったら、この鏡を使うといい」
野獣はひとりさびしくベラを見送りました。これからはもうずっとひとりぼっちなのだ——野獣は思いました。

第6章

p.24

おとうさんはベラの姿をみると、すっかり元気を取り戻しました。その日から病気はどんどん良くなっていき、ついに元通りの元気な体に戻りました。

もう夏が終わろうとしていました。

風も冷たくなってきました。

あちこちの花びらも葉も散り始めました。

p.25

「野獣のお庭はどうなっているかしら？」ベラは、魔法の鏡に向かいました。

「かがみよ、かがみ、よく見せておくれ。

あの美しいバラと木々を」

p.26

鏡を見てベラはハッとしました。野獣がぐったりとしてバラの木のそばに倒れています。まわりには花びらが散っていました。

バラの花は今にも枯れてしまいそうです。そして野獣も……。

そのとき、ベラは気づきました。ベラがどれほど野獣のことを思っているかを。

p.27

またたく間に、ベラは鏡に足を踏み入れました。そして野獣のそばに駆け寄りました。

「野獣さん！私の大切な野獣さん！」ベラは泣き叫びました。「死なないで！いなくならないで！私のそばにいて！」

涙がベラのほほを伝い、それが野獣のほこりだらけの毛の上に落ちました。

p.28

涙にぬれた野獣の毛がきらりと光りました。すると野獣は目を開けました。ベラの瞳からまた涙がこぼれま

した。こぼれるたび、それはキラキラと光りました。

涙が次から次へと野獣の上に落ちました。その1粒1粒が、野獣をよみがえらせていきました。それはまるでおれかけたバラに水をあたえたときのようにでした。

p.29

ついに野獣が起き上がり、目をこすりました。

「君はほんとうにぼくのことを好きだと言ってくれるのか？」野獣が言いました。「君のように美しい人が、こんなみにくいぼくのことを！」

p.30

そのとき、なにかがピカッと光りました。次の瞬間、野獣がいたその場所に、美しい王子様が立っていました。

ベラは何が起こったのかわからず、王子様に向かって叫びました。

「あなた、なんてひどいことを！私の大切な野獣さんをいったいどこへやったの」

p.31

王子様はこれまでに起こったことをすべて話しました。

それは長い長い話でした。約束をやぶったり守ったりすることについて、見た目のうつくしさやみにくさについて、人を愛することや人に優しくすることについて……王子様は一生懸命話しました。

全てを理解したベラは言いました。「私たちは大切なことを学んだのね。決して人を見た目で判断してはいけないということを……」

そうして、ベラと王子様はそれからずっと幸せに暮らしました。

Traditional Tales Stage 9 The Children of Lir

第1章 リヤ王

p.2

はるか昔、アイルランドにリヤ王という名前の王様がいました。リヤ王は強くて勇敢な王様だったので、アイルランドの強大な軍隊をも支配していました。王様の家族は、女の子1人と男の子が3人の子どもたちと女王様でしたが、この女王様は子どもたちにとってはママ母でした。王様は子どもたちを心の底から愛していました。

p.3

一方、女王様はほんとうはこの子どもたちが好きではありませんでしたが、愛しているふりをしていました。王様が子どもたちと一緒にいるのを見るたび、やきもちを焼きました。時が経つにつれ、女王様のやきもちはどんどんひどくなり、やがて憎むようになっていきました。

女王様は思っていました。「あの子たちさえいなくなれば、王様は私だけを愛してくださるのに……」

p.4

子どもたちが弓矢で遊んだり、子馬に乗ったり、楽器を演奏するとき、女王様がそばにいて手助けをしてあげることはありませんでした。

その間、女王様はみんな忙しくしているのを見はからってこっそりとその場を抜け出し、自分の秘密の部屋に行っていました。ここでのろいの魔術の練習をしていたのです。まさか女王様が魔法が使えたり、魔法の薬を作ったりできるなんて誰も知りませんでした。

p.5

女王様は時には、みんなに内緒で森に出かけて行き、小さな動物を使って試しに魔法をかけてみたりもしました。ある時はカエルを魚に、ある時は虫をカタツムリに変えたりしました。そのうちに女王様は恐ろしい考

えを抱くようになりました。あの子どもたちがいなくなるようにするには、自分の魔法を使うしかないと感じていたのです。

p.6

そんな女王様も王様の前では、子どもたちにとっても優しく接していました。王様に、まるで女王様が心から子どもたちを愛しているかのように思わせたのです。夜になると、暖炉のそばに座って、子どもたちと一緒に機を織ったり、昔の立派な人のお話を聞かせたりして過ごしました。王様はそんな女王様の様子を見て、とても幸せでした。

第2章 のろいの言葉

p.7

ある日、戦争が始まったという知らせが王様のもとに届きました。王様は自分の軍隊に大きな戦いの準備をさせました。そして家族を集めると、戦争のためにしばらくお城を離れなければならないと話しました。子どもたちは王様と離れるのをとても悲しがりました。

p.8

別れの日、さびしそうに王様に手をふる子どもたちを、女王様はあたたかく抱きしめました。

「きっと、すぐ帰っていらっしやるわ」女王様は子どもたちに言いました。「何か楽しいことをしましょう。明日みんなでピクニックに行きましようか」

p.9

翌日はよく晴れた暖かい日でした。女王様は言いました。

「みんなで森の中を散歩して行きましよう。そして湖のそばでピクニックをしましよう」

森の中を飛んだり跳ねたりしている子どもたちを見ながら、女王様はにやりと笑いました。

「いいわ。いよいよ計画を実行にうつす時が来たようね」

p.10

子どもたちが湖でバシャバシャと遊んでいると、女王様がぐねぐねと曲がった杖を水につけて、なにやら不思議なことばを唱え始めました。すると突然子どもたちが、慌てふためいて大騒ぎを始めました。自分の体が変わり始めたのです。子どもたちは必死で体を丸めました。そのうちに鼻と口も長くちばしの形に変わってしまいました。子どもたちは泣き叫びました。

p.11

変わり果てたお互いの姿を見た子どもたちは恐怖におののきました。女王様は甲高い声で笑いました。「あなたたちを白鳥にしてあげたわ。これで王様の愛もすべて私のものよ！」そして、こんな言葉を唱えました。

白鳥はあちこちをさまよう。もう2度とお父様の家には帰れない……。

北から南に、東から西に、羽を休める場所はない。

のろいを解く方法はただひとつ、それはウエディングベル——

その花嫁と花婿は、長く争いを続けてきた国同士の者でなければならない。

女王様はそう言って笑いながら、子どもたちを置き去りにしました。

第3章 王様の帰宅

p.13

子どもたちははじめ、何がおこったのかわからずただおびえるばかりでした。でも次第にさびしさが募り、心細くなってきました。何か言おうとしても、話すことができず、重い翼をバタバタ動かしたり、慣れない長い首をのぼしたりしました。子どもたちは、この新しい自分たちの体に慣れ、白鳥のように空を飛んだり動いたりするほかはなかったのです。

p.14

子どもたちはのろいの言葉の意味がわかっていました。もうお城には2度と帰れないのです。この悲しい歌を覚えていた1番上の姉さんが、ハミングし始めました。するとほかの兄弟もそのまわりに集まって来ました。

p.15

そのうちに兄弟も一緒にハミングを始めました。最後にはみんなと一緒に歌っていました。気がつくと、歌うときだけは人間の声が出ていました。話すことはできませんでしたが、子どもたちはとても喜びました。そして、白鳥になった気持ちをお互いに歌にのせて語り合いました。

p.16

数週間後、王様とその軍隊は戦争で勝利をおさめてお城に戻ってきました。

「子どもたちはどこだ」と王様がたずねると、女王様は「西部に住んでいる私のいとこの家に行っています」と答えました。

王様はこの話を聞いていやな予感がしました。

p.17

王様は毎日子どもたちのことを考えていました。ある日、王様が湖のそばを歩いていると、湖に4羽の美しい白鳥がいるのを見かけました。王様の姿を見た子どもたちは、羽をばたつかせながら、王様の近くに集まって行きました。王様はこのハクチョウたちが歌いながら自分を呼んでいるのがわかりました。

p.18

王様は木の下に座って、子どもたちが悲しい物語を歌うのを聞いていました。王様は子どもたちの首をなでながら、くしゃくしゃになった羽をなおしてやりました。王様の心は悲しみに押しつぶされそうでした。そして悪魔のような女王に対して計り知れないほどの怒りを感じました。

p.19

白鳥たちが歌いました。

「私たちは湖から湖へ、岸辺から岸辺へと渡ります。こののろいが解けるまで、旅は続きます。でも約束します。アイルランドのこのあたりに来たときには必ず、この湖に来ることを」

王様はこれをきいて少し心がなぐさめられました。

p.20

王様は顔を真っ赤にして、女王様をどなりつけました。

「おまえはなんとひどい人間だ！おまえが私の子どもたちを白鳥にしたのだな！」

「まあ、あなた、なんてバカなことを！子どもたちは私のいとこのところにいるんですよ」

「もう、うそはたくさんだ！私はあの子たちから聞いたんだぞ！」

p.21

「そんなはずありませんわ。だって、あの子たちは話せないんですよ！」

女王様が叫びました。

「いいや、あの子たちは歌なら歌えるんだ。私はおまえのしたことは何もかも知っているんだぞ」

「あなたが私よりあの子たちを愛するからですわ」女王様が甘えたように言いました。

王様の怒りが爆発しました。

「その杖をよこして、この国から出て行け！もう2度と戻ってくるな！」

第4章 嵐の海

p.22

女王様がお城から出て行きました。王様は馬に乗って高い崖の上に行き、そこから海に向かって魔法の杖を放り投げました。すると、海が荒れ、波が高くなりました。波は崖にあたって砕けていきます。空には真っ黒な雲が集まって来ました。

p.23

王様が魔法の杖を捨てているころ、白鳥たちは海を渡っていました。そして嵐の中に巻き込まれて、おびえていました。嵐の中なんていったいどうやって飛ばいいのでしょうか。横なぐりの風と打ちつけるような雨の中、稲妻が光り、雷鳴がとどろきました。

p.24

「こんな嵐の中じゃ、みんなバラバラになってしまうわ」お姉さんが歌いました。「できるだけ離れないようにして。嵐が過ぎたら、アザラシ岩で会いましょう」

大波が白鳥におそいかかり、みんな散り散りになってしまいました。雷鳴のとどろきが子どもたちの声をかき消しました。海に溺れてしまったらどうしよう……子どもたちは心配でなりませんでした。

p.25

いちばん先にアザラシ岩に着いたのはお姉さんでした。お姉さんは他の兄弟たちがやってくるのを待ちました。まもなく、波にさらされて疲れ切った白鳥が2番目に到着しました。太陽が輝き始めていました。嵐は過ぎ去ったようです。

そのとき、2羽の白鳥の姿をした灰色の影がこちらに向かって飛んでくるのが見えました。4羽の白鳥は再会を喜び合いました。子どもたちはまたみんな一緒になれたのです。

p.26

その後、何年もの長い間、白鳥たちは旅を続けました。そんなある日、白鳥たちはかつて自分たちの住んでいたお城の跡を見つけました。

「ぼくたち、ここに住んでいたんだね。子どもの頃はよくここで遊んだね」弟の1人が歌いました。そこにはもう何もありませんでした。人も動物も何も……。麦畑だったところには今はイラクサが茂っていました。白鳥たちは悲しげに飛び立ちました。

第5章 旅の終わり

p.27

やがて、女王様が子どもたちを白鳥の姿にした、あの湖にやってきました。湖の中ほどにある小さな島から優しい音楽が聞こえてきました。白鳥たちは音色に引きつけられて、近くまで飛んで行きました。そこにはフルートを引いている世捨て人がいました。その人の横には銀色の鎖がおいてありました。

p.28

「あんたがたはリヤ王の子どもたちかね」世捨て人が聞きました。

「はい、そうです。でもあなたはどなたですか？」と白鳥は歌いました。

「私は君たちを守るためにここにいるんじやよ。お父さんは君たちには羽を休める場所が必要だろうと言ってね。そしていつかはきっとここに帰ってくるだろうと言っていた。何年何年も前に、お父さんはこの魔法のくさりを作らせたんだよ」

p.29

白鳥たちはくさりでつないでもらいました。これで白鳥たちにもやっと住むところができるのです。白鳥たちはここで世捨て人とともに幸せに暮らしました。

ある日のことです。ずっと争いの絶えなかった王国どうしの王子様とお姫様が結婚することになったという話が聞かれました。白鳥たちは歌いました。

「ああ、これでやっとこのおそろしい呪いが解ける！」

p.30

白鳥たちはその結婚式の日を心待ちにしていました。昔のことを思い出しながら、みんなで声高らかに歌いました。ウエディングベルがなったそのとき、銀の鎖が解き放たれ、体中の羽毛が地面に落ちました。そして今、白鳥たちがいたその場所にはリヤ王の子どもたちが姿を現したのです。

p.31

女王様にのろいをかけられてから何百年という時間が流れていました。リヤ王の子どもたちは、もうすっかり年をとっていました。みんな一緒に横たわり、そして眠りました。リヤ王の子どもたちにようやく自由と幸福が戻ってきたのです。

Traditional Tales Stage 9 East of the Sun, West of the Moon

第1章 くま

p.2

むかしむかし、ある遠い国——トロールと魔法の国——であったお話です。あるところに、貧しい百姓の家族が住んでいました。家族は今にも崩れそうな家に住み、みな古びた服を着ていました。お金ももうほとんどありません。冬はもうすぐそこまできているというのに……。

「この雨と風の音をきいてくれ！」百姓は泣き叫びました。「いったい、どうしたらいいのだ。だれか助けてくれ！」

p.3

「トン、トン、トン」

だれかが百姓の家の扉をたたきました。開けてみるとそこには大きな白くまが立っていました。

「私はひとりぼっちでさびしいのです」白くまが言いました。「娘さんのアストリドを私にかしてくれませんか？ そうしたら、あなたたちをみんなお金持ちにしてさしあげます」

p.4

「金持ちだって？」百姓が言いました。

「それもかなりのお金持ちです。アストリドのことは大切にします。お約束します。木曜日にまた来ます。そのときまでに決めてください」

とはいえ、百姓の家はあまりにも貧乏なために、娘をかしてやるしかありませんでした。木曜日になりました。気がつけばアストリドは、百姓の家から遠ざかって行く白くまのかたい白い毛にしがみついていた。

第2章 お城

p.5

白くまとアストリドは1日中歩き続けました。夜がやって来ると、目の前に険しい崖があらわれました。もしかしたらそれは、お城の壁だったのかもしれませんが。そして、気がつけばアストリドは、金と銀で彩られたまばゆいばかりの大広間にいたのです。

p.6

「このベルをどうぞ、アストリド」くまが言いました。「何か必要なものがあつたら、それを鳴らして」

「柔らかいベッドで、ステキな夢をみたいわ。ただそれだけ……」

そう言ってアストリドはあくびをしました。

その夜、アストリドは夢を見ました。ステキな王子様がアストリドが寝ているベッドのすぐ横に座っているのです。同じ夢を、次の晩も、そのまた次の晩も、アストリドは見ました。

p.7

1日中、アストリドは何かあるたびにベルを鳴らしました。

そして夢の中の王子様は、ひと晩中アストリドのそばに座っていました。

4日目、アストリドはくまを呼んで頼みました。

「うちに帰りたいの。家族に会いたいよ」

p.8

「きっとここに帰って来てくれますか？」くまが言いました。「それに、どんなことでもお母さんと秘密の話をしてないと約束してくれますか？」

「ええ、約束するわ」

それを聞いたくまは、アストリドを家に送って行きました。

第3章 ふたつの約束

p.9

最初の約束を守るのは簡単でした。なぜなら、うちに帰ってみると、家族はほんとうにお金持ちになり、幸せに暮らしていました。とてもくまのそばをはなれるわけにはいきません。

難しかったのは2つ目の約束でした。このトロールと魔法の国では、娘というものはお母さんに秘密の話をせずにいられないものなのです。

p.10

「毎晩、王子様の夢を見るの」アストリドは言いました。「それともはじめからずっと本物だったのかしら？」
「そうねえ……」お母さんはほほ笑いながら言いました。「今度、この魔法のろうそくを使ってごらんなさい。ただし、この魔法のろうそくを1滴でもこぼしてはだめよ」「もちろんよ！」アストリドは笑って言いました。

アストリドはとても楽しくすごしましたが、今はやってみたくて早くて帰りたいので、早くお城に帰りたくてたまりませんでした。

第4章 ろうそく

p.11

その夜、金と銀の城に帰ったアストリドは、いつもより早くベッドに入りました。そしてしっかりと目を閉じていると、だれかがアストリドのベッドのそばに座る音がしました。そこですばやくあの魔法のろうそくをとってみると……

p.12

王子様はほんとうの本物でした。アストリドがあわてて王子様のシャツにかけてしまった3滴のろうそくがそれを物語っていました。

「ああ、アストリド」王子様がアストリドを責めるように言いました。「なんてことをしてくれたんだ。ぼくはロング・ノーズというトロールに魔法をかけられているんだ。

昼間は白くまだけど、夜はこの国の王子に戻れるんだ。今きみが何かの魔法をぼくに掛けてしまったから、もうトロールの魔法は解けなくなってしまった。だからもうぼくはロング・ノーズと結婚しなければならないんだ！」

「どうしたらあなたを救えるの？」アストリドは泣きながら言いました。

「もうどうしようもない」王子様も悲しそうに言いました。

「ロング・ノーズは、きっとぼくを結婚式の日まで自分の城に閉じ込めておくれよう。その城は“太陽の東、月の西”というところであって、だれもその場所を知らないんだ」

「それでもなんとかしなくちゃ……」アストリドは言いました。

第5章 3人の老婆

p.14

翌朝起きてみると、王子様もお城も消えてなくなっていました。アストリドの来ていた美しい服も全部消えていました。しかたなく、前に着ていたぼろぼろの服を身につけると、アストリドはすぐに旅立ちました。

「太陽の東、月の西……。きっとだれかがロング・ノーズの居場所を知っているはずよ」

アストリドはそう言ってどこまでもどこまでも歩いて行きました。

p.15

アストリドはある高い山のとっぺんにやってきました。そこで1人のみにくい老婆に会いました。老婆は言いました。

「ロング・ノーズなんて知らないねえ。隣の山に住んでいるあたしの姉さんにきいてごらん。ほら、この金のりんごをもっておいき。いいことがあるよ」

「どうもありがとう」アストリドは言いました。

p.16

老婆のお姉さんという人も何も知りませんでした。「ロング・ノーズなんて名は聞いたことがないねえ。隣の山にもう一人の姉さんがいるからきいてごらんよ。ほら、この金のくしをもっておいき。いいことがあるよ」「どうもありがとう」アストリドは言いました。

p.17

でも、3人目の老婆も首を横に振って言いました。「あたしも聞いたことがないよ。あんたをあたしのところによこすなんて、あの子たちもばかだねえ。ほら、この紡ぎ車をもっておいき。いいことがあるよ」「どうもありがとう」アストリドは言いました。アストリドはこれでまたひとりぼっちになってしまいました。残されたのは、金のりんごと、金のくしと、金の紡ぎ車でした。

第6章 4つの風

p.18

「太陽の東、月の西！」アストリドは泣き叫びました。「だれか！ロング・ノーズの居場所を知ませんか！」「私は知っている」東の風がささやきました。「私をそこへ連れて行ってくれませんか？」アストリドは必死に頼みました。

p.19

「私の兄弟——西の風、南の風、北の風——が良いと言えば連れて行ってやろう、アストリド」「お願いします！」アストリドは一生懸命頼みました。東の風はアストリドをさっと空にすくいあげました。そして、東から西、西から南、南から北へと、アストリドの体は風に乗って、山を越え、海を渡り、森を飛んで行きました。

p.20

最後に北の風がアストリドを下におろしてくれました。「風さんたち、どうもありがとう。ここはどこですか？」

「太陽の東、月の西だよ。ロング・ノーズの居場所さ」北の風が言いました。

「さようなら！」アストリドが手をふると、北の風はひゅーと飛んで行きました。

第7章 ロング・ノーズ

p.21

アストリドの目の前にあったのは、これ以上がないというほど大きくて暗いお城でした。ずっと上の方の窓から、ロング・ノーズがアストリドを見下ろしていました。「こんにちは、アストリド」ロング・ノーズは甲高い声で笑いました。「王子様を探しているんだらう？その金のりんごをくれたら合わせてあげるよ」「どうぞ」アストリドはすぐに返事をしました。

p.22

お城の中に入ると、王子様が深い眠りについていました。手にはからっぽになった銀のカップを持っています。「王子様は魔法の薬を飲んだのかしら？だとすれば、眼覚めさせることはできないのかも……」アストリドはどうしたらよいかわからず悩みました。王子様はその夜はずっと眠ったままでした。

p.23

次の日、アストリドは金のくしをロング・ノーズに差し出しながら言いました。「これをさしあげます。だからもう1度王子さまに会わせてください」「ああ、いいともさ」ロング・ノーズは鼻をならしました。「結婚式の日まで、王子はすぐに眠れるようにしてあるんだからね」それが、あの銀のカップに入っていた魔法の薬なんだわ……アストリドは思いました。

p.24

その夜、王子様が薬で眠っている間に、アストリドは銀のカップに小さな穴をあけておきました。

「今度はほんとうに魔法の薬がこぼれるようにしなきゃ。王子様を目覚めさせるにはこれしかないもの。ロング・ノーズは欲張りだから、あの金の紡ぎ車をあげて最後にもう1度王子さまに会わせてもらうことにしよう」

ロング・ノーズは簡単に承知しました。

「別にかまわないさ。明日は王子と私の結婚式だもの」

p.25

王子様が寝るときに、ロング・ノーズは銀のカップに魔法の薬を入れましたが、アストリドが開けた小さな穴にはちっとも気がつきませんでした。それに、その穴から薬がもれてしまっていることにも……。

だからしばらくして、ロング・ノーズが行ってしまったあと、王子様を目覚めさせるのはたやすいことでした。

p.26

「アストリド！」王子様が叫びました。「ぼくを助けに来てくれたのかい？」

「できることならそうしたいわ。だけどいったいどうすればいいのかしら？」

「真実の愛を確かめるためのテストをしよう。このシャツの魔法のろうをきれいに洗い落せた人が勝ちだ。ぼくはその人と結婚するんだ！」

第8章 テスト

p.27

この話を聞いたロング・ノーズは、はじめはとてもいやな顔をしました。でもプライドがものすごく高かったので、とても「いやだ」とは言えませんでした。

「ふん、シャツなんてだれでも洗えるさ！」ロング・ノーズはあざ笑うように言いました。「洗い桶と、せっけんと、ブラシをもっといで」

p.28

でもロング・ノーズは少し言いすぎたようです。シャツは、ロング・ノーズが強くこすればこするほど、黒くなっていきました。しまいには「トロールたち、手伝ってくれ！！」と騒ぎ始めました。

お城中のトロールが集まって来ました。でもシャツは黒くなるばかり……。

「もうやめるんだ！」ロング・ノーズが大声で言いました。「アストリドにやらせてみようじゃないか。あんな小娘にあたしたちトロールを負かせるかどうか見せてもらおうじゃないの」

p.29

真実の愛があれば、どうなるか……。

アストリドが冷たくてきれいな水に王子様のシャツをつけると、たちまち雪のように真っ白になりました。

p.30

勝負はロング・ノーズとトロールたちの負けでした。それ以来、だれも彼らの姿をみることはありませんでした。もちろんあの太陽の東、月の西でも……。

王子様とアストリドの結婚式にはみんな——家族も、友だちも、あの3人の老婆も、4つの風も——招待されました。

そして、金と銀のお城が再び姿をあらわしました。これでアストリドも王子様もやっと自分の家に帰ることができたのです。それから二人はずっと幸せに暮らしました。これほどステキな魔法はないですよ。

Traditional Tales Stage 9 Mulan

p. 1

むかしむかし、ある遠い国であったお話です。そこには竜が暮らし、人々は日々戦っていました。これはある1人の名高い戦士の物語です。

第1章

p. 2

ムーランは、いつものように、家の片すみでそっと働いていました。毎日毎日同じように、ムーランは機を織り続けているのです。横糸を通す音が「シャー、シャー」と聞こえてきました。

p. 3

家の中はとても静かでした。体を壊している父さんが寝床で寝がえりをうちました。いつも忙しい母さんは食事のしたくをしています。まだ小さな弟もできるだけ大きな音を出さないように静かに遊んでいます。

「シャー、シャー」ムーランが機を織る音も聞こえてきました。でもその中にいつもとはちがう音が混ざっています。いったい何の音でしょうか？

p. 4

それは、ムーランのため息でした。

「どうしたのだ？」父さんがたずねました。

「どうしてため息なんかついているの？」母さんも聞きます。

「男の子のことでも考えてるんじゃないの？それとも新しい靴のこと？」弟が言いました。弟は生意気盛りで、いつも姉さんをからかってばかりいました。

p. 5

「町では紙を見たのよ」そう言って、ムーラン

はまたため息をつきました。「この国に敵が攻めてきたんですって。だから、どの家からも男の人を1人ずつ、皇帝軍にさし出さなければいけないのよ」

第2章

p. 6

「うちからもだれか出さなければ、家族みんなが罰を受けることになる」父さんもため息をつきました。「私が行かなければ……」そう言って必死で足に力をいれましたが、父さんの弱った体では立つことさえできませんでした。

「そんな体では1日だって戦えないわ！」母さんが大声で言いました。「もうあなたには戦いは無理よ」

p. 7

「父さんのかわりにぼくが行く！」と弟が言いました。弟は木でできたおもちゃの刀を持ってきて、戦うまねを始めました。でもあまりにもぐるぐるふりまわし過ぎて、足をすべらせ、バタンと倒れてしまいました。イテッ！

p. 8

ムーランはおもちゃの山の中に倒れこんでいる弟をじっと見つめました。まだおもちゃの刀を放そうとしません。この子は、国のために戦うにはまだまだ幼すぎました。

そして父さんの方に目を移しました。父さんもすっかり年をとりました。かつては、とてもりっぱな兵士でした。でもそれももうずいぶん昔の話です。

p. 9

「私ならちょうどいいわ」ムーランは考えました。「私はたいていの男の子より足も速いし、馬に乗るのも上手だわ。判断力もあるし、戦い方だって

何年も父を手伝いながら練習してきた。私が
軍隊に行くべきなのよ」

第3章

p. 10

そこでムーランは思い切って、自分の考えを言う
ことにしました。

「私は馬と鞍を買います。そして父さんの代わり
に軍隊に行きます」

弟は大笑いして言いました。

「バッカじゃないの！姉さんなんて、ただの泣き
虫じゃないか！」

p. 11

母さんはおろおろして言いました。

「そんなこと、絶対にダメだよ。おまえは私たち
と一緒にここで暮らすんだ。女の子は軍になんか
入れやしないよ」

父さんは病気のせいであまり話すことはできませ
んでしたが、ただ、声をふりしぼって言いました。

「ムーラン、ダメだ。やめるんだ！」

p. 12

でもムーランの気持ちはもう決まっていました。

「私に考えがあるの。私が男の子のような格好を
すればいいのよ。よろいに詰め物をして着れば、
だれも私が女の子だとはわからないわ！」

「そんな、まさか！」と母さんが言いました。

「危険だ！」父さんは息をのみました。

「どうかしてるよ！」弟も言いました。

でもムーランはもう決心したのです。家族を救う
ために何でもする覚悟はできていました。

ムーランは東の市場に行って、足の速い馬を買
いました。

p. 13

西の市場では、鞍を買いました。

北の市場では、よろいかぶとを1式そろえました。

南の市場で、刀を買いました。

第4章

p. 14

家に帰ると、ムーランは髪を結びあげて、よろい
を身につけてみました。そしてその夜は一晩中、
戦いの練習をしました。父さんのやり方も取り入
れました。そこにいたのは、もはやかつてのムー
ランではありませんでした。ムーランはすでに1
人の兵士になっていたのです。

p. 15

夜明けとともに、ムーランは父さんと母さんに別
れを告げると、さっそうと馬に乗って出かけて行
きました。

「姉さんは、きとお茶の時間にはもどってくる
よ」と弟が冗談を言って笑いました。

でも、ムーランはその日のお茶の時間にも、次の
日のお茶の時間にも戻っては来ませんでした。

p. 16

ムーランは3日間かけて、黄河沿いを進みました。
地面は固く、肌寒い風が吹いてきます。夜になる
とあたりは真っ暗で、ムーランは心細くなりました。

父さんや母さんや弟の顔が浮かんできて、何度も
何度もうちに帰りたいと思いました。でもムーラ
ンは勇気をふりしぼって先に進みました。3日目
の夕暮れ時、やっと黒山にある軍隊に到着しまし
た。

p. 17

ムーランが門に近づくと、見張りの兵士がやって
きて行く手をふさぎました。

「どこにいくつもりだ」兵士が問い正しました。ムーランは体が震えましたが、低い声で「ご命令に従って、入隊に来ました」と答えました。

兵士が「よし」というふうに首を縦にふりました。ムーランは驚きました。こんなに早く入隊が認められるなんて……。

p. 18

でもその時から、ムーランはある不安におびえる生活が始まりました。それは自分が女の子であることが仲間の兵士たちにわかってしまうのではないかという不安でした。おまけに、軍隊の生活はほんとうに厳しく、日常生活の風景や音に触れると、家のことや家族のことを思い出しました。

昼は延々と続きました。

夜はさらに長くなりました。

ムーランにとっては、ほんとうにつらい毎日でした。

p. 19

でもムーランは途中で投げ出したりしませんでした。訓練も必死でやりました。やりや盾の使い方も学びました。攻め方も守り方も、風の流れに逆らわずに馬に乗る方法も学びました。

やがてムーランにとって初めての戦いの場がやってきました。

p. 20

戦場を前にしたムーランは、恐怖のあまり血も凍るような思いを抱きました。ひざはガタガタとふるえ、心臓はドキドキと鳴りました。それでもムーランは刀をしっかりと握りしめて、戦いのぞみました。

そのムーランのなんと勇敢なこと！

そのムーランのなんとすばやいこと！

その姿は誰にもひけをとりませんでした。

おまけにムーランは頭もよく切れました。刀を操りながらも、頭も使って、敵の裏をかいていったのです。

p. 21

敵がおそってきたときには、やりを使って頭上を飛び越えました。へたな攻撃はまるで踊るようにしてかわしていきました。盾のうらに隠れ、敵がやってきたら飛び出して行って、相手の度肝を抜きました。

仲間の兵士たちはムーランを尊敬の目で見ようになりました。まだだれもムーランが女の子だということに気づいていません。

そしてムーランの背中をたたいて言いました。「あんな技はなかなか思いつかないよ！」

p. 22

それがムーランのはじめての戦いでした。

やがてムーランは立派な戦士となり、仲間たちの頂点に立ちました。

こうして、長い1年を無事に乗り切りました。その後も、2年、3年、4年、5年、6年……そして10年もの間みごとに戦いぬいたのです。

p. 23

ずいぶん遠いところにも行きました。

広大な森の中も、馬で駆け抜けました。

灼熱の砂漠も、走り抜けました。

険しい山の雪道も、馬で登りました。

ムーランは馬とともに旅を続けました。1000マイル、2000マイル、3000マイル、4000マイル、5000マイル、6000マイル……その距離はついに1万マイルに達しました。

p. 24

その間、ムーランはずっと髪を結いあげたままでした。ずっと気持ちを引き締めていました。秘密

も守りました。いまやムーランは誰もが知る将校となり、多くの部隊を勝利へと導きました。それでもムーランは、家族の夢を見ない日はありませんでした。父さん、母さん、弟はどうしているのかしら……。

第6章

p. 25

ついに戦争が終わりました。皇帝軍の勝利でした。皇帝はムーランの働きに非常に満足していました。「そなたは実に勇敢で、忠実だった」皇帝は言いました。「ここに褒美をとらせよう。金でも、ダイヤモンドでも、御殿でも、なんでも好きなものを申せ」

p. 26

ムーランの答えは決まっていました。「足の速い馬 1 頭と、自由を私にお与えください！」ムーランは言いました。「戦いの場から退き、家族とともに静かに暮らしたいのです」皇帝はこれを聞き入れました。

p. 27

ムーランの父さんと母さんは馬のひづめの音を聞いて、家の外に出てきました。馬にのった立派な将校がこちらに向かってきます。それはムーランでした。後ろにはムーランひきいる部隊の兵士たちが控えています。その姿はまばゆいばかりでした。弟も家から飛び出ってきて、大喜びで兵士たちを歓迎しました。

p. 28

ムーランは家の中に入ると、かつて自分が使っていた部屋に向かいました。懐かしい自分の机に座り、よろいかぶとを脱ぎました。髪をおろし、ほこりを洗い流しました。そしてす

その長い、ゆったりとしたドレスを身にまといました。

p. 29

そのまま外に出て行き、待機していた兵士たちに声をかけました。

「私はムーランです」

兵士たちは目を見張りました。

「女だって！」「まさか！」

信じてもらうためには、時間をかけて説明しなければなりませんでした。

p. 30

驚いた兵士たちは、ムーランのことをいろいろなところで話してまわりました。そうして、1 人の少女が戦士になった物語は人から人へと口伝てに広まって行きました。やがて、その話は山を越え、海を越えて、ほかの国々でも知られるようになりました。

p. 31

ムーランの祖国では、今でもこんな歌が歌い継がれています。

とてもほんとうのこととは

思えないけれど

我々は学んだのだ

もうわかっている

見た目で人を判断してはいけないことを

君にも英雄になれるチャンスはある

この話をみんなに語り継ごう

この話を本にしよう